
目指す地位は縁の下。

ビス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

目指す地位は縁の下。

【Nコード】

N6841Y

【作者名】

ビス

【あらすじ】

異世界に飛ばされた女子高生、相馬沙羅は、彼女そっくりな貴族の令嬢の身代わりとして後宮入りする事に。

彼女の目下の悩み事は、後宮から逃げる事でも、後宮の一番になる事でも、日本に帰る事でも無く、大好きな皇帝陛下を、どうしたら幸せに出来るか？だった。

美人な奥様方が仲良しだったら、彼もきつと嬉しい筈！と、自分磨きそっこのけで、側室達の間を取り持つ事に奔走する健気な天然少女の話。

プロローグ

私は今、とても悩んでいます。

あ、申し遅れました。私の名は相馬^{ソウマ} 沙羅^{サラ}。一介の女子高生トリックパーです。

若干妖しい語感な気がするのは、気のせいです。

軽く言っではいますが、異世界に飛ばされた当初は、本当に驚きましました。

友達と夏休みに遊園地へ行つて、逆バンジーにチャレンジ。怖くてぎゅっつと瞑っていた目を開けたら薄暗い路地裏にいた。ありえん。

普通…いや、異世界トリックに普通の定義があるかは知らないが、セオリーとしては落ちるモンなんじゃないの。
飛んだら異世界ってどんな新境地だ。

そして私が消えた後のバンジーのゴムの行方が気になる。昔懐かし
のコントの様に誰か、ばっちゃんされてないといいけど。

とにかく、不本意ながらトリックしてしまった私は、当然の事ながら訳が分からなかった。まずは自分の頭を疑った。

でも夢や幻にしては、色んな事がリアルで。

薄汚れた壁に貼られた、色褪せたポスターに書かれた、不可思議な文字。

湿った土の上に、無造作に置かれた樽の影から這い出す、見たこともない形の虫。

夏休みだった筈なのに、肌をさす様な冷気と、嗅いだ事の無い、すえた様な臭い。

五感が私に訴えた。

此処は私が生きていた場所では無い、と。

混乱し、恐慌した私は、その場から一步も動けずに、震えていた。寒さと、恐怖に。

で、気付いたら攫われてた。

あ。この辺前振りなんで、色々サクサク進みます。

その時の私の恐怖や憤りは、取り敢えず今は置いておきましょう。

攫われた私の行き先は、奴隷市場か娼館だろうと予想していました。お先真つ暗です。

見ず知らずの狸親父に好き放題される位なら…と蒼白になりながら

覚悟を決めたのですが、私のついた場所は、どちらでもありませんでした。

其処は豪華なお屋敷で、どうやら貴族のお宅の様です。

でもまだ狸親父に売り払われる可能性が消えた訳じゃない、と警戒する私の前に現れたのは、壮年の男性とその妻らしき女性でした。

因みにダンディーなおじさまでした。奥様は清楚な美人。

妻公認で人身売買とか流石に無いと思うのでセーフ。と私は漸く安堵しました。

安堵したのも束の間、夫婦に抱き締められた。何のプレイだ。

離して下さいとパニくる私に、二人は驚いた顔になり恐る恐る『サラサ』じゃないの？と訊ねた。
惜しい、『さ』がいつこ多い。

彼らは驚き、そして悩んだ後、私にお願いがある、と言った。

そのお願いとやらをザックリ纏めると、彼らはどうやら私に、娘の身代わりになって欲しいらしい。

数日後に嫁入りを控えた彼らの娘が、今日突然いなくなったそうだ。結婚が嫌で家出とか黄金パターンだよな、と大層不謹慎な事を考えてしまったが、娘は割と乗り気だったらしい。

急に雲隠れしてしまった娘に、彼らは蒼白。

嫁ぎ先は彼らより身分が上。今更此方側から撤回なんて出来ない。

何とかして娘を捜し出そうとした所、娘そっくりの私を発見。勘違いで攫ってきてしまったと。

…あれ。何かそれ違う黄金パターンな気がする。

娘今ごろ逆バンジーされてませんか？私の代わりに富士山見ながら空舞ってませんか？

そうなると、娘さんを捜し出すのは不可能に近い気がするし、私も娼館行きは遠慮したいので、身代わりで嫁入りを決意しました。

この世界で頼る人もいませんし、どうやったら元の世界に帰れるかなんて全く分からないし、取り敢えずやるやだけやってみましょう。

ところで貴族の奥さんってなにすりゃいいの。

と、早速躓きましたが、正確には貴族の奥さんじゃありませんでした。

嫁ぎ先は、

なんと王様。

……色々あり得無いですぎやしませんか。

側室（仮）の悩み。

「…どうかなさいましたか？サラサ様。」

窓辺に置かれた椅子に腰掛け、ぼんやりと空を見上げていると、気遣わしげな声がかけられた。

緩やかに波打つ栗色の髪、長い睫毛に縁取られたつぶらな瞳。ビスクドールの様な美少女は、心配そうに私を見つめている。

「大丈夫よ、カナナ。心配してくれてありがとう。」

カナナは、『サラサ』の実家からついてきてくれたメイドさんだ。此方の世界の常識を知らない私をフォローする為、父母（仮）がつけてくれた娘なので、私が相馬沙羅である事も知っている。

本当のお嬢様では無い私を、気遣い過ぎる位気遣ってくれるカナナを心配させたくなくて無理矢理笑顔をつくるが、カナナは余計心配そうな顔になった。

それでもカナナは、それ以上突っ込む事はしない。さりげない形で私を慰めてくれる。

「…珍しい茶葉が手に入ったのですが、気分転換にいかがですか？」

「わあ、楽しみ！カンナのいれてくれるお茶、凄く美味しいから。」

「光荣ですね。では早速ご用意致します。」

ウフフ、と少し照れた様な微笑を浮かべたカンナが部屋を出て行くのを見送り、私はフウ、とため息をついた。

…ダメだなあ。カンナに心配かけちゃうなんて。

でも冒頭で記した様に、此処最近私はずっと悩んでいるのだ。

ちなみに結婚する事に対しての悩みじゃない。
てゆうか、もうとっくに結婚したし。

此処、後宮ですから。

私はこの国…コウコク鴻国の皇帝陛下の…えつと何番目だったかな……確か
15？番目くらいの側室となりました。

数日でこの世界の色々な事や、貴族の子女としての礼儀作法その他

諸々を詰め込まれ、半ば朦朧としている内に、気が付いたら此処にいた。どんだけショートしてたんだ自分。

…で、肝心の旦那様ですが……びっくりする位、格好良い人でした。

黒髪黒目のワイルド系で、私の好みど真ん中！！神様ありがとう！！

ですが格好良すぎて直視出来ません！！

アイドルだって、遠くから眺めてキヤイキヤイ騒いでるのが楽しいんです。間近で旦那を見て鼻血出しそうになる妻とか、無いだろ…。

しかも旦那様は、凄く優しい方でした。

詰め込み学習のせいで、ろくに働かない頭のまま後宮入りして、その日の夜が初夜とか…流石にキツかった。

泣きそうになりながらも、拒否なんて許され無い事は分かっていたから、蒼白な顔のまま、私はずっと俯いていた。

夜に後宮に渡ってきた皇帝をお迎えし、さあ覚悟を決める私、と腹を括ったところ、皇帝は私を見て苦笑した。

ちんけな小娘を馬鹿にする笑いでは無く、困ったような微笑み。

寝台に腰掛け、近くのテーブルに用意してあった酒瓶とグラスを手に取った皇帝は、固まった私を手招きし、自分の隣をポンポン叩き座れと示した。

酌を頼む、と酒瓶を渡され、私は慌ててグラスにお酒を注いだ。

皇帝はガラスの器を目で楽しむ様に数回揺らす。

薄暗い灯りの中でも美しい玻璃は、色鮮やかで、昔旅行先で見つけた薩摩切子を思い出した。

私がぼんやり見ている先、鼻先で香りを確かめた皇帝がお酒に口を付けようとしたところで、私は我に返る。

慌てて皇帝を止めた。

今思えば不敬過ぎるが、あるシーンが思い浮かんだのだ。

後宮とか皇帝とか遠い世界過ぎるけど、小説の中ではよく聞く『毒味』。

……毒味とか、正直怖い。でも、目の前にいる人は、私なんかと違って、替えのきかないたった一人のひと。

震える声で『私が先に』と申し出ようとしたが、皇帝は、優しい笑みで私の髪を撫で、そのまま酒を呷った。

いわく、毒には耐性があるから大抵のものは、彼にはきかないそう
だ。

後、色やにおい、ついでにカンで分かるらしい。

…カンで。

脱力した私は、だいぶ緊張もほぐれ、その後朝まで皇帝とお話していた。

…アハンな事は一切ありませんでした。

初訪問は、そういう事はしないのかな？と思っていたが、どうやら蒼白だった私を哀れに思った皇帝が見逃してくれた様です。

彼は朝帰る前に、自分の指に傷をつけ、寝台に血痕を残していったから。

お役目を果たせなかつたと、私が責められないように。軽んじられないように。

…ジャスト好きな男性に、そんな優しい扱い受けて、惚れない女の子なんている？

私はまんまと惚れましたよ。

まさかの異世界で、旦那様に片想い中です。

…でも、旦那様には既に10人以上の美しい奥様がいます。

咲き誇る薔薇の様な彼女らに比べたら、私は野草…いや雑草。

恋の成就是早々に諦めました。

でも、あの方の為に何かしたい。

私はずっと、皇帝の為に何ができるかを悩んでいるのです。

02 (前書き)

お気に入り登録して下さい。方々、ありがとうございます。m (

m
凄く励みになります！

数日悩んで、カンナを心配させていた私ですが、気分転換にと庭へと散歩に出た日、ある事に気付いたので。

東屋から、咲き誇る花々を眺めのんびりと過ごしていた私は、視界の端に回廊を歩く貴妃の姿をとらえました。

数人の侍女をつれ、回廊を進んでいるのは、楚々とした美少女。お名前は確か…シャロン様、とおっしゃったか。

鴻国の藩属国の第三王女…そう、真正正銘のお姫さまなのだ。

初めてお会いした時はあまりの可憐さに、大人しやかな美少女！！リアルプリンセス！！とひそかに興奮していたりした。

(…ん？)

ゆったりと回廊を歩いていたシャロン様は、何かに気付いた様に顔を強張らせ、足を止めた。

彼女の視線を辿り、前方に目を向けると、違う貴妃が歩いてくるの

が見える。

沢山の侍女の先頭を、堂々とした様で歩くのは、華やかでキツめの美女。

鴻国の有力貴族の令嬢…アズミ様。

彼女は、シャロン様に気付いたようだが、全く歩調を緩めずに歩く。逆にシャロン様は、廊下の端へと寄ってしまった。…完全に負ける。

怯える様に俯くシャロン様を、アズミ様は一瞥し、馬鹿にする様に鼻を鳴らす。

…いくら王女様といえど、藩属国の小さな国の第三王女。しかも彼女自身、とてもか弱く大人しい方なので、余計に侮られてしまう。

アズミ様が去った後、シャロン様はお付きの侍女の制止を振り切り、泣きながら駆けて行った。

…たぶん擦れ違った時に、なにか言われたんだろうな。15くらい
の少女が、あんな百戦錬磨っぽいお姉さんには勝てないよね。可哀
想に。

…見ての通り、後宮の貴妃同士はとても仲が悪い。

まあ後宮とは、皇帝の寵を得る為に競い合う女の戦場だから、当り前といえは当り前なんだけど。

でもさ、折角こんなに美姫が集まっているのに、喧嘩ばかりじゃ、皇帝陛下だって癒されないんじゃないかな。

自分の奥さん達が、仲良しでニコニコしてくれた方が、絶対嬉しいよね！

私は知らず知らずの内に、テーブルの上で手のひらを握り締めていた。

ずっと、後ろに控えていてくれたカンナが、気遣わしげに声をかける。

「……サラサ様？」

「…カンナ。」

「はい？」

振り返った私の顔を見て、カンナは目を睜った。

今まで意気消沈していたのが嘘の様に、ニッコリと笑う私に、カナは瞠っていた目を笑みの形に細める。

「私、決めた！」

「はい。」

何を決めたのかも言っていないのに、カナは穏やかに笑んだ。

お元気になられた様で、ようございました。と私が元気になった事のみを喜ぶ。

会話のキャッチボールが成り立っていない気もするが、良い侍女に恵まれたなあ、私。

「カナナ、私ね…縁の下の力持ちになるわ！」
大好きな皇帝陛下の為に、何か出来ないかとずっと悩んでいた。

美しい貴妃達のように、彼の目を楽しませる事も出来ず、
教養ある貴妃達のように、彼の興味のある話も出来ない。

詩歌や楽器など、雅やかな趣味も無く、私は彼の為に何も出来る事が無いと落ち込んでいたけれど…

彼が後宮に来た時に、癒される様、煩わせる事が無い様に、

私は、お姫様達を仲直りさせよう。

彼女達には色んな目的や責務があるから、それは簡単な事じゃないだろうけれど、

それでも、少しでも歩み寄れる様に、私が頑張ろう。

彼女達が、憂い無く咲き誇れる様。

彼女達が、皇帝陛下を満たし癒せる様に、

私には、私にしか出来ない事がある筈。きっと。

皇帝陛下の癒し。

最近、小さな可愛らしい猫を手に入れた。

「…本日もお渡しとは…珍しい。」

執務を終え、食事や湯浴みを済ませたオレが、後宮へ行くと告げると、護衛の武官である幼なじみは何とも言えない表情を浮かべ、そう呟いた。

時刻は疾うに深夜をまわっている。皆寝静まっている中、まるで忍び込む様に後宮へ入るオレを見て、その表情は益々うるんなモノへと変わった。

「…後宮の主人である方が、何故盗人の様に隠れる必要があるのです。」

嘆かわしい、と肩を落とす幼なじみに、オレは苦笑を洩らした。

「他の妃に見つかっては、虐められかねんからな。」

軽く言つてはみたが、実際オレが一人の所に通っている事がバレたら、『虐め』なんて可愛らしいものでは済むまい。

下手したら、命の危険すらある。

「オレが多少情けない思いをする程度で、アレの平和が護れるなら安いものだ。」

「……………」

オレが笑つてそう断言すると、幼なじみは暫く沈黙していたが、やがて諦めた様に嘆息した。

言つても無駄だという事が、長年の付き合いで分かるのだろう。

無言でついてくる幼なじみと共に、オレは後宮の一室を目指した。

「…では陛下。私は此处でお待ち致します。」

「ああ。」

部屋につくと、幼なじみと別れ、彼女の寝室を目指す。

寝室に続く扉の隙間からは、ボンヤリとした薄灯りが洩れていた。

ゆっくりと戸を開けると、寝台から半身を起こし、書物を読む横顔が見える。

いつだったか、書物を読むのが苦手だと言った彼女に、オレが贈ったものだ。

幼子の好むお伽噺なのだが、贈った後に、嫌味にとられはしないかと後悔したのだが、彼女は何とも嬉しそうに満面の笑みを浮かべ、礼を言ってくれた。

…あんなに真つ直ぐで、愛らしい存在を、オレは他に知らない。

貴族の女は、自分の短所を殊更隠そうとするものだ。

貴族では無い女も、喜ぶのは高価な贈り物だけだ。

サラサは、己の短所を認め、改善させようとする、素直さと勤勉さがある。

高価でも無い、しかも配慮に欠けた贈り物を、喜んでくれる。世界に一つの宝石を贈られた様に、心からの笑顔をくれる。

側室としては少々風変わりとは言えるが、そんなところが良いと思う。

サラサの傍は、酷く居心地が良い。

「…サラサ。」

「！」

静かな声で呼ぶと、彼女は弾かれた様に顔を上げる。

直ぐに入り口に立つオレを見つけ、パアツと表情を輝かせた。

「陛下！」

寝台からおり、パタパタと此方へ向かって来た彼女は、嬉しそうに顔を綻ばせてオレを見つめる。

「おかえりなさいませ。」

「…ただいま。」

後宮では、使う事の無い挨拶。

でも彼女に言われると、凄く安心する。

ほっと、漸く息がつける心地がするんだ。

テーブルに用意してあった酒瓶を引き寄せようとする彼女を制し、オレは寝台へと滑り込む。何時もの様に、隣を空けてポンポンと合図を送ると、彼女は目に見えて赤くなつた。

純粹無垢な様子に、暖かな気持ちが入み上げた。

「何もしない。眠るだけだ。夜が明ける前には帰るから……おいで。」

甘やかす笑みを浮かべ、手招きすれば、彼女は暫く悩んだ後、おずおずとやってきた。

真っ直ぐな黒髪をゆるりと撫でると、吊り上がり気味の漆黒の瞳が、オレを見上げる。

まるで臆病な子猫を懐かせようとしている気分だ。

抱き込んだ彼女の細い体は、甘く優しい香りがして、

気が付けばオレは、今までに無い位、深い眠りに落ちていた。

…サラサの香りには、癒しと睡眠導入の効果があるに違いない。

側室（仮）の願い。

最近、何故か皇帝は私の部屋で寝て行く。

なんの比喻でも、控え目な表現でも無く、本当にただ寝に来る。

今でこそ忠犬よろしく待っていますが、二回目に来た時は、驚きま
したよ。

初夜失敗してるのに何で来たし。まさか仕切りなおしのな！？とド
キマギしたのですが、完全なる自惚れでした…。

未だにチューさえされていない側室なんて、私くらいのものじゃな
かろうか。

確かに私、色気ゼロですし。そんな気になれないのは当り前かもし
れませんが……………落ち込んでなんかいません。いませんとも。

……………デリケートな部分なので、そつとしておいてやって下さい。

最初に赤っ恥かいて妙な期待をバツサリ切り捨てられたおかげか、
最近はず直に接する事が出来る様になりました。

皇帝の態度を見る限り、私を女として見ているというより、ペット感覚な気がするんですね。

よく撫でられるし、しかも触り方が全くいやらしくない。絵本くれたし…あれ、子供扱い??

何より、意識している女性…しかも妻を、ただ抱き締めるだけで寝るなんて、健康な青年男子のする事じゃないでしょう。

皇帝の態度は、あれですよ…えーと…あ、アニマルセラピー。

気付いた時は、好きな人にペット扱いって…!!とショックを受けたりもしましたが、それでも好きなものは好きなんです。

元より、叶うはずの無い恋です。会えるだけでラッキーとおもってあげよう、と割り切る事にしました。

そう悟ってしまえば、もう怖いものはありません。

色っぽい方面の癒しは他の方にお任せして、ペットならペットの特権として思いっきり甘えさせていただきますよ。

それに割り切ってしまうえば、ペットポジションってかなりおいしいのです。

撫でて貰えるし、ぎゅって抱き締めて寝てもらえるし。寝顔も見

放題。

…あ、寝顔といえは、気になる事があるのですが。

皇帝は、他の方のところへ通っている時は、ちゃんと朝まで寝ているのでしょうか？

私のところへ来てくれる時は、深夜に来て夜明け前に帰ります。

それは恐らく一介のペットである私を寵妃だと、他の方に勘違いさせてしまわない為だと思いますが…彼の体が心配です。

私がおの方に嫌われてしまわない様に、他の方が傷付かない様に、配慮して下さるのは、とても嬉しいのですが、そんな事を繰り返しては、体が休まりません。

…やっぱり、早いとお奥様方に仲良くなっていただかなければ。

無謀は承知。

ですが、私は私なりに、譲れないものがあります。

二回目に来て下さった貴方に、テンパった私が思わず『おかえりなさい』と言ってしまった時に、見せてくれた笑顔を、

安堵したような、無防備なあの笑顔を、護りたいというのは、分不相応な願いなのでしょうが。

側室（仮）の挑戦。

さて。

姫様同士を仲良くさせようと意気込んでみたものの、正直ノープランです。

脊髄反射で生きてます。すみません。

取り敢えず、姫様同士を仲良くする前に、私が仲良くなってみようと思います。

ほぼ面識の無い女に仲立ちされても、気持ち悪がられるだけな気がしますので。

いきなりアズミ様とか難易度高過ぎなので、大人しく優しいシャロン様にまずはアタック。

……べ、別に最初から狙ってた訳じゃないですよ？

細くて可憐でぎゅーっとしたら壊れてしまいそうなシャロン様萌え！とか、私が男だったなら土下座してでも嫁に来て欲しいとこだよね…とか、思っていないんだから！！

……すみません。わたくし嘘をつきました。

リアルお姫様に超キュンキュンしておりました。

シャロン様が侍女の皆さんとの会話中、控えめな微笑みが、はにかむ様に少しくしゃりとなるのを遠目に見た時から、仲良くなったら間近であれ見れるのかな……と羨ましがってたりもしました。

ですが!!

私リサーチによると、シャロン様のご趣味は手芸!! 詩をしたためる事!! うん無理!!

……だって私一番の苦手科目、家庭科な女ですよ?

課題の浴衣を必死に仕上げようとはしたものの、何故か袖から腕が出ないし、測った筈なのに丈はつんつるてんだし。先生涙目だったよ……。

詩の方は……うん。

たぶん中学二年生的なものならいける気がする。

非常に頭悪さげなものが出来上がる気がします。

あ、それ以前に私、字が完璧じゃなかった。

皇帝陛下に貰った絵本のおかげで、なんとか五歳児程度の読み書きは出来る様にはなりましたが。

あれ、絵が入ってるから非常に助かる。流石皇帝…分かってる！！でもつい口が滑ったとはいえ、貴族の子女が読み書きがイマイチとか…アリなの？私迂濶過ぎない？

……ま、まあ、突っ込まれてないからセーフなんだよね？

で、話を戻しますが、趣味を介してシャロン様と仲良くなるう計画は、そんな訳で早々に頓挫しました。

私に女らしさを求めるのは、ペンギンに鳥らしさを求める位無謀だという事です。

うーむ。

腕組みをし唸っている私の前に、スツとティーカップが置かれた。

「…ありがとう、カナ。」

「はい。」

優しい微笑みを浮かべるカンナにお礼を言い、紅茶を飲む。

… 良い匂い。癒されるなあ。

こっちの世界にもお茶があってよかった。残念ながら緑茶は無い様ですが。

発酵させずに飲む、という発想が無いのでしょうか。もしかしたら、貴族には知られていないだけで、地方を探せばあるのかもしれないね。

「…………お茶会とか、出来ればいいのに。」

「お茶会、ですか？」

私の独り言を拾ったカンナは、不思議そうに首を傾げる。

「うん。仲良くなりたい方がいるんだけど…」

苦笑してみたが、無理な事は私にも分かっている。

お呼ばれするならともかく、身分が下な私が主宰のお茶会に招くという事は、明らかに不敬。

侮って喧嘩売っている、ととられる可能性が高い。

仲良くなるどころか嫌われてしまいます…。

お茶会でなくとも、隣り合って会話が出来れば、仲良くなる為の糸口が見つかるかもしれないのに。…こういつ時、身分ある立場って面倒だなんて思います。

「…どなたと仲良くなりたいのでしょうか？」

「……………え？」

少し沈黙し、思案する素振りを見せたカンナは、じっと私を見る。

「…シャロン様だけど？」

それがどうかした？と首を傾げる私に、カンナはニッコリと笑む。

「その方なら、お茶会を介さずとも、お近づきになれるかもしれません。」

「えっ！？本当？」

…そんな会話をした、次の日。

私は今、東屋近くの物陰に隠れております。

時間は早朝とも呼ばれる時間です。

後宮の規則で取り決められている、部屋を出てもいいとされるギリギリな時間なので、人影はほぼありませんね。

侍女の皆さんは、活動を初めてらっしゃいますが、側室の皆様は朝の準備に忙しく、東屋に近づく方は皆無です。

何故そんな場所にいるかということ…

「…！」

カツン、コツンと、ゆったりとした足音が聞こえ、東屋の方を窺うと…本当に来ました！シャロン様です！

カナナが教えてくれた通り、シャロン様がいらっしゃいました。凄いな…カナナの情報網恐るべし。シャロン様のご趣味を調べてくれたのも実はカナナだったりします。

カンナって何者…？

モヤモヤしたものを抱えつつ、シャロン様へと視線を戻します。本日
も美少女です。

「……………」

お一人で東屋に来たシャロン様は、懐から何かを取り出しました。
ハンカチに何かを包んであるのでしょうか？此処からでは見えませ
んが。

それを広げたシャロン様は、小さく口笛を吹きました。

「……………」

すると何処からともなく、小鳥が数羽下りてきました。

シャロン様が差し出した白魚の様な手に、警戒無くとまります。

……………成る程。餌付けしてらっしゃるんですね。

ハンカチに包んであったのは、パンクズか穀物的なものなんですよ。
う。

「……………」

ぼんやりとソレを見守っていた私は、いつの間にか見惚れてしまっていました。

朝の光を透かし、キラキラと輝くプラチナブロンド。

繊細な美貌に穏やかな笑みを浮かべ、戯れる小鳥を愛しそうに見守る様は、まるで聖女の様で、

その光景は、お伽噺の挿し絵そのものだった。

「……………」

ぼけつと見守ってしまった私は、ついつい引き寄せられる様に、一歩踏み出す。

パキリ、と

足元で小枝か何か割れた音で、私は我に返った。

しまった、と思ってももう遅い。

「……………」

バサバサツと鳥が飛び立ち、シャロン様は弾かれた様に私の方を見て、大きく目を睜った。

「……………あ、」

「！」

内心ダラダラと冷や汗をかきながらも、私はへらりと笑い、彼女に声をかけようとしたが、

シャロン様は顔を反らし、逃げる様に駆けて行ってしまった…。

……………なにしてるの自分。

皇帝陛下の困惑。

「……………どうかしたか？」

またも深夜、忍んで訪れた部屋でオレを待っていてくれた少女に、オレはそう問うた。

何時も通り笑顔で、おかえりなさいと出迎えてくれたサラサの様子
が、今日は少しだけおかしい。

嬉しそうな笑みも、オレのグラスに酒を注いでくれる仕草も何時も
通りなのだが……………何故か今日は、いつもよりも距離がある。

心の距離などとは言わない。武骨な男が、精神論など語るつもりは
無い……………物理的に、少し遠いのだ。

いつもは意識せずとも、柔らかで甘い彼女の香りを感じる位、
戯れに伸ばした手が、容易く彼女の髪を絡め取る位の距離なのに、
サラサが意識的にあけたであろう、人一人座れる位の隙間が、酷く
落ち着かない気分させる。

「……………え、」

オレの問いに、彼女は目に見えて狼狽した。
ソレを見て、この隙間が彼女の意志である事を確信する。

「……………サラサ？」

「……………う。」

体を退こうとした彼女の、寝台に付いていた手を上から重ねる様に
押さえ、距離を詰める。

至近距離で直っ直ぐに瞳を覗き込めば、頬が薄らと赤く色付いた。

「……………オレが何かしたか？」

「……………へ？」

「気付かないうちに、お前に不快な思いをさせてしまったか？」

「……………え、は？」

オレの言葉に、ポカンと口をあけたサラサは、次いで戸惑う様に瞬
きをする。

「そんな事、」

「…気を遣う必要は無い。嫌な事は、嫌と言ってくれ。」

慌ててかぶりを振るサラサの言葉を遮り、オレはそう続けた。

「オレは、気のきかぬ粗野な男だ。王族とはいえ、詩を誦じ樂を奏でる様な雅やかさなど欠片も持たぬ。……戦局は読めても、今お前が何を憂いているかは分からぬ情けない男だ。」

だからサラサ、嫌な事は嫌と言え。

でなければオレは、お前にどう触れたらいいか分からない。

そう、心のままに吐露すれば、サラサは愛らしい顔を、熟れた果実の様に真っ赤に染めた。

見開かれた目が戻るのに合わせ、眉も下がる。困り顔のままサラサは、上目遣いにオレを見る。可愛い。

「…陛下は、何もしてません。………これは私の問題なんです。」

つつい引き寄せられる様に、サラサの髪を撫でようとしたが、サラサは顔を反らす事でそれを避ける。

……これで、何もしてないと言われてもな。

「……サラサ？」

若干、恨みがましい目付きになってしまった様だ。サラサは、うっ、と言葉に詰まる。

やがてバツが悪そうに、彼女はポツリと呟いた。

「……これは何と申しますか……えーっと、罰則？」

「……は？」

「私なりに、私の気を引き締める為に決めた条件と申しますか……。」

「……サラサ？」

意思の疎通を図る為、名を呼ぶが、サラサはすっかり己の思考に捕らわれているようで、ぶつぶつと呟いている。

「私はダメダメです。初戦敗退したダメ子なのですよ。次は同じ失敗をしない為にも、罰の意味で陛下断ちといいますか……。」

「……オレ断ち？」

それは一体何だ。と目で問うと、キョトンと目を丸くしたサラサは、「願いが叶うように、好きなものを断つ…ようは願掛けなのです。」と、事も無げに言ったのけた。

意志薄弱な私は会う事まで断てませんでしたので…せめて接触断ちです。などと云う愛らしい猫を、

まったく。

どうしてくれようか。

「…サラサ？」

「……はい。」

「その願掛けは、オレの罰にもなり得るのだが？」

「……………」

オレを見上げてくるサラサの顔には、『何で？』と思いつきり書いてある。…馬鹿正直というか素直というか。

こんなにも顔に出やすいと、さぞかし生き辛かろうと心配になったが、この手の人間は味方も多いな、と思い直した。現にオレは、出会ってまだ数ヶ月だというのに、無条件に近い信頼を寄せつつある。

こういう類たぐいの人間を裏切るには、相当の覚悟もしくは、

相当の悪意が、必要だろう。

「……………お前はオレの癒しだ。…折角会いに来たのに触れないというのは、少々辛い。」

「！」

我ながら、夕チが悪い。何が少々か。

サラサの漆黒の艶やかな髪を指先に絡める様に一房掬い、引き寄せたそれに、チユ、と軽く唇を押しあてる。
覗き込んだ彼女は、真っ赤な顔のまま固まってしまった。

「…サラサ？」

間近で瞳を合わせたまま、口元だけで笑ってみせると、サラサは忙しなく視線を彷徨わせた。

…あまり虐めるのは可哀想だが、オレにも譲歩出来ないものがある。

「…願掛けは、他の事にしないか？」

「……………。」

オレがそう提案すると、サラサは不服そうに眉を下げる。

小さく『一番じゃないと意味ない気がするのに』と呟いているが、

逆効果だとは分かっていないな。

…そんな風に真っ直ぐな好意を向けてくれる可愛いお前が隣にいて、触れられないなど…なんの拷問だ。

「…サラサ。」

「！」

意識的に声を低くし、耳元に囁く様に呼べば、抵抗していた可愛い猫は、あっさりと白旗を上げた。

「……………分かりました…止めます。別方面のものにしますです…。」

しゅん、と頂垂れた彼女の旋毛つむぎを見ながら、オレは満足げに笑む。

漸く得られた感触を堪能するべく、ゆっくりと手の平をサラサの頭に滑らせれば、直前まで暗い表情をしていたのが嘘かのように、サラサは嬉しそうに破顔した。

……………可愛い。可愛いが…お前、オレがいないところで、誰かに騙されるんじゃないぞ。

自分のした事を棚に上げ、心配してしまった事は、彼女には秘密にしておこう。

「……ところで、サラサ。何を失敗したんだ？」

「……………」

思う存分撫で、満足したオレは、彼女が注いでくれた酒を飲みつつ、気になっていた事を聞いた。

…さっきは彼女に触れられるか否かに重点を置いてしまったが、何に対しての反省だったのかまでは聞いていなかった。

サラサは手元の酒瓶を両手で握り、僅かに俯く。

「……可憐な小鳥さんを、怯えさせてしまいました。」

「……………」

小さな黒猫が、鳥に戯れつく光景が頭に一瞬浮かんだ自分に呆れつつ、頭を振る事でソレを追い払った。

「…小鳥？」

「凄く繊細で、とても綺麗な小鳥さんです。…いくら仲良くなりたかったからって、物陰から忍び寄るのはダメです。とうかきつと私の目が肉食獣ばりにギラギラとしていたのですよ。だから引いたんです。逃げちゃったんです。」

「……………」

…オレの目の届かないところで、この猫は一体何をしているんだろう。

内容はいまいち理解出来ないが、ズレた方向に一生懸命なのは分かった。

「……よくは分からないが、虐めようとした訳ではないのだろうか？」

「勿論です！」

「なら、嫌われてはいないのではないか？」

「……………」

不安そうに表情を曇らせるサラサを、安心させる様にオレは笑った。

「敵意や害意が無い事が分かれば、時間はかかるかもしれないが、

いつかは打ち解けられるんじゃないか？」

「……………はい。」

素直に頷き微笑むサラサを見ながら、オレはひっそりと苦笑を浮かべた。

サラサのいう『小鳥』が、比喩なのかそれとも言葉通りのものなのかは分からない。

…本物の野生の小鳥と仲良くなるうとする、などという突飛な発想が否定出来ないのが、サラサがサラサである所以なのだろうか…、

一体、何をし始めようとしているのか。

…本当にこの猫は、目が離せない。

側室（仮）の反省。

皇帝と、そんな話をした翌日。

またも早朝から東屋へ向かった。

……懲りないなあ、って思うでしょう。

ですが一応、私なりに考えての事なのです。

シヤロン様は、あのご様子からすると、数日は此処に近寄らなくなってしまうんじゃないかと思ひまして。

「……………」。

現に、いらっしゃいません。

前日の時間を、過ぎているにも関わらず。

…やはり、私が不用意に驚かせてしまったせいですよね。

近くの柱に手を突いて、頂垂れそうになったのを堪え、私はぐっと前を向きました。

私が今やるべきは、反省会ではありません。それはまた今夜にでもやろうと思います。

今まず優先しなければいけない事は……

懐に手を入れ、ハンカチに包んだものを取り出す。

ジャジャーン！と効果音を入れながら。…勿論心の中ですよ。

これは何かと言いますと…カナナに用意してもらった穀物です。たぶん稗ひえとか粟あわとかそんな感じ。

私のせいで、シャロン様にご飯を貰えなくなってしまった小鳥さん達の朝ご飯です。

さあ、おいでませー！

「……………あれ？」

ジャジャーンと広げたまんまのハンカチを手に、私は立ち尽くす。

…朝なので、小鳥さんの囁きは聞こえてきますが、全く下りてくる

様子が無いですね……なんでだ。

「……うーん。」

一生懸命頭を捻り、昨日の光景を思い出してみる。

白く細い手を差し出し、手の平や肩で戯れる小鳥を愛でるシャロン様、マジ天使。

……ではなくて。

もう少し前……あ。

そういえば、口笛で呼んでました！

なるほどなるほど。

では！

「……………」。

口を窄め、息を吐く私の唇からは、ヒュー…プスー…という何とも物悲しい音が洩れた…。

…そういえば、私、口笛吹けないんだった。

…なに？お前、なんなら出来るの？って顔で見ないで下さい！

例え口笛さえも吹けない裁縫も出来ない…ないない尽くしの団子蟲でも、生きているんだから一応…！

…自分で言って哀しくなりました。でも一応、私にも特技的なものはあるんですよ。

シャロン様みたいに女の子らしさを期待されると大変困りますが…

「……………あの、」

あ、でもお掃除は好きです。雑巾の絞り方には定評があります。窓掃除とか、ピカピカになっていく過程が超楽しいですよ…身長がチマいので、脚立は必須ですけど。

「……………あ、あの…」

料理は…壊滅的に下手ではありませんが、上手とは言えませんね。…何というか、とても微妙なものが出来上がります。

砂糖と塩を間違えるベタさは無いものの、ウスターソースとオイスターソースを…薄口と濃口醤油を等、地味なミスを繰り返す為、

…食べられない事は無い…が、美味しいとも言えない、という、大変反応に困る仕上がりとなります。

幼なじみの男の子にはよく、『お前の料理はじんわりマズい。』と評価されてましたっけ…。

「……………あ、…あのっ!!」

「ひよっ…!？」

遠い目をして過去を懐かしんでいた私は、背後から大きめの声をかけられ、息を飲む。

…変な声が出ました。

バクバク早鐘を打つ胸を押さえながら、後ろを振り返ると、そこには…

白皙の美貌を、緊張の為か赤く染めた、

可憐な天使…ではなく、今日も可愛いシャロン様が立っておりました。

.

側室（仮）の提案。

「……………」

「……………」

私達は互いに無言のまま、暫し見つめ合った。

…ただしその様子は真逆です。

緊張で倒れてしまうんじゃないかという位、頬を赤らめるシャロン様。

…そして、そんなシャロン様をガン見する私。

だって、可愛い可愛いシャロン様が、こんな間近に！！しかも緊張で涙目なんですよ！？

そりゃガッツリ見るでしょう。こんな機会早々ありませんからね。

「……………」

ああ、可愛い…。

ピルピル震えている…多分此処で私が『わっ!!』とか大きな声を出したら泣いてしまうんじゃないかと思えます。

……ああ、駄目よ沙羅。やってみたい…超やってみたいと思っちゃ。

「……………あ、の」

悶々としている私に、シャロン様は小さな声で話し掛けてきた。

それによって私は、危うい方向に行きかけていた頭を正常に戻す事が出来ました。

…危ない危ない。

仮にも側室でありながら、開けてはいけない扉を開けるところでしたよ。

「はい。何でしょう?」

へらりと笑みかけると、シャロンは漸く、少しだけ肩の力を抜いた。

よかった。近所のちびっ子相手に鍛えた『警戒心を抱かせないスマイル』が有効な様です。

私安全、コワクナイヨー。

「……昨日、此処にいらした方ですよね……？」

「……………はい。」

シャロン様の質問に、今度は私が拳動不審になる。

誤魔化しようが無いから頷いたけど、変質者扱いされないよね……？

シャロン様は、少し躊躇った後、決意した様に面をあげた。
長い睫毛に縁取られた空色の瞳が、懇願する様に私を見る。

「……………黙っていては、下さいませんか……？」

「……………はい？」

……………え？何を……？

予想外の言葉に、私はキョトンと目を瞠る。

だがシャロン様は、そんな私の間抜け面が目に入っていないのか、
泣きそうな顔で言葉を続けた。

「……………餌付けなんて、してはいけない事は分かっているんです。……」

侍女にも止められておりますし。」

…えっ！？駄目なの？

私いま、思いつきりやろうと思っていましたが、
ていうか今現在餌を持っているんですが。

自分の事に必死なシャロン様は、私の手元のハンカチが何を包んで
いるかまで思い至らないようです。

「……規則には、」

「…規則には書いてありません。ですが、皆様が暮らしている場所
で、その様な勝手は許されませんでしょう？」

控え目に口を挟んだ私に、シャロン様は力無い笑みを浮かべる。

「…私は王女とはいえ、辺境の国に住んでいた田舎者。…皆様が当
り前に出来る事さえ聞かなければ分からない、常識知らずなのです。」

「……………」。

悲しそうな表情には、諦めや卑屈さが混在していた。

予想でしかないけれど、それらの言葉は、此処にきてからシャロン
様が、誰かに言われた事なんじゃないでしょうか。

少し外れた行動を、こつも恐れるのは、何かをする度に、誰かに嘲笑われたから。

所詮、田舎者と、影口をたたかれたからなのでは。

「……………」

規則に書いてないなら、いいんじゃないですか、と開き直るには、私くらいの図太さが必要ですからね…。

繊細で大人しいシャロン様には無理かもです。

……………うーん。

どうでしょう。

「……………あ。」

「……………？」

…忘れていました。

東屋の欄干に、昨日シャロン様が餌をあげていた小鳥たちがとまっていたのを見て、私は手元の餌の存在を思い出す。

シャロン様から視線を外し、私は小鳥たちに向かって餌を差し出した。

「……………しかし当然の事ながら、近付いてくれません。私無害。コワクナイヨー。」

しょんぼりとしながらも、欄干に少しだけ餌を置いた。

そして離れると、小鳥の一羽がちよこちよこ近寄ってきて、それを啄む。

よかったー。

一羽、一羽と増えてゆき、みんなで私の餌を食べてくれる。本物の小鳥さんは、警戒をといてくださった様。

「……………。」

振り返ると、綺麗な青い瞳を睜るシャロン様。

此方の小鳥さんも、警戒をといてくださると嬉しいのですが…。

私はもう一度、シャロン様にへラリと笑い掛ける。

「…これで同罪です。」

更に大きく睜られた瞳を見つめながら、『二人きりの秘密にしまし
よう』と小さく呟くと、

見開かれていた青空から、雨粒みたいな雫がこぼれ落ちた。

側室（仮）の発起。

「……………美味しい。」

カンナの淹れてくれたお茶を飲み、ゆっくり深呼吸をしたシャロン様は、そう小さく呟いた。

「…よかったです。」

落ち着いた様子のシャロン様に、私も漸く安堵の息をついた。

もう涙は零れていないものの、目は充血しているし、目元も鼻の頭も赤い。

一目で泣いた事がバレてしまうシャロン様をお部屋に帰すわけにもいかないのです、一時私の部屋に避難していただきました。

侍女の皆さんが心配してしまうので、言伝をカンナにお願いしたので、今は部屋に二人きりです。

「落ち着きました？」

「……………」

私の問いかけに、シャロン様はコクリと頷く。カップを置くと、顔を上げ、じっと見つめていた私と視線を合わせた。

「…ご迷惑をおかけ致しました。」

ゆっくりと、だが綺麗な所作で頭を下げるシャロン様に、私は慌ててかぶりを振る。

「迷惑じゃないです！！寧ろ役得…じゃなかった…此方こそ驚かせてしまって。」

やっぱり本音がダダ洩れた。言い繕う私をシャロン様は不審に思う事は無かったようで、穏やかな微笑を浮かべ『ありがとうございます。』と言ってくれた。

それから少し恥じる様に頬を染める。

「…子供みたいに泣いてしまって…驚かれたでしょう？」

「いえ！寧ろ激萌えた……………ゴホン、…不安定な時くらい、誰にで

もありません。」

…うん、自重しようか私。

さっきから言動が変質者だから。なんか最近女子高生の皮を被ったオッサンになりつつあるから。

冷や汗をかきながらも、誤魔化す為にヘラリと笑むと、シャロン様は不思議そうに首を傾げた後、ニコ、と控え目に笑んだ。

「……私、此処に来てから、優しくされた事がなくて……あ、勿論侍女の皆は良くしてくれるんですが…対等に話して下さる方がいなくて……その、嬉しかったんです。」

「……………!!!!」

シャロン様は、僅かに俯きながら、はにかむ様にクシャリと相好を崩す。

不意討ちに見てしまった私は、思わず顔を真っ赤に染めた。

…へ、変態とか言っちゃダメです。

だって見たかった笑顔が、こんな早く、しかも間近で見れたんですよ!?!?

…ていうか、可愛いー…!!!!!!

ガン見している私には気付かず、シャロン様は俯き加減のまま話を続ける。

旋毛も愛い

「…故国は、寒さ厳しい国でした。冬がとても長く、ほんの僅かな夏の間だけ訪れる渡り鳥はいましたが…あんな色鮮やかな鳥は、初めて見たのです。…だから、どうしても近くで見たくて。」

「…それで餌付けなさってたんですか。」

成る程。

確かに、鮮やかな鳥って寒い所にはいなそうなイメージだね。

「……………そんな事をしては、他の皆様の迷惑になるかもしれない、と分かっていたのですが、止められなかった。……………私は寂しかったのかもしれない。」

「……………シャロン様。」

「……………ですから、あの……………これからも、仲良くしていただけますか……………?」

「勿論……！！！」

思わず私がこぶしを握り締めて断言すると、シャロン様のお顔が嬉しそつに綻ぶ。

ああもう何ですかこの子。ぎゅうってしたいぎゅうってしたいー！！

「……良かった。……此処に来て初めて、優しい方にお会いしました。」

「えっ、そんな事ありませんっ！」

そんな、おこがましい！！

私なんて、側室の皮を被ったセクハラオヤジですよ！？

ぶんぶん首を振って否定する私を見て、シャロン様は、何かを思い返す様に、伏し目がちに微笑する。

「……私、此処がずっと怖かったんです。他の側室の方も、衛兵も侍女も、……陛下も。」

「陛下も……？」

私は、シャロン様の言葉に、瞠目した。

私の中の陛下は、とても誠実で優しい人。

何を怖がる事があるのだろうか、と思う。

だけどシャロン様は、堅い表情のまま続けた。

「…王族に生まれたからには、政略結婚は当然です。…ですが、^こ鴻^う帝に嫁ぐ心の準備は出来ておりませんでした。」

「……………?」

鴻帝とは、鴻国の王を、他国の人間が呼ぶ別称、とは聞いていたけれど…何か違和感を感じた。

それは、発音的な問題だけじゃなくて……………怯え、畏怖の様な。

「……………。」

私は、この国の事を…………いや、この世界の事を、何も知らない。

突貫的に詰め込まれた少ない知識だけでは、分からない事だらけだ。

シャロン様の国の場所も、

青い鳥の名前も穀物の名前も、

シャロン様の、怯えの理由も。

「……………」。

…いいえ。私は、頭では分かっている筈です。

シャロン様の国は、鴻国の藩属国だと教えられました。
その時に、頭の片隅で思ったじゃないですか。

…戦争があつたのかな、って。

現代つこの私には、テレビ画面の向こうの出来事。
でも此処では、現実…そう現実なのです。

…目を逸らすのは、ダメなのですよ、私。

これを機に、学ばなければいけないのかもしれないかもしれません。

思い立ったが吉日です。

私は早速、図書館に行く事にしました。

「ふわー。結構大きいんですね。」

書庫に使われている建物を見上げながら、私は独り言をこぼす。

取り敢えず、勉強しようと思いついた私は、王宮内にあるであろう図書館を使えないかとカンナに相談してみた。そうしたらカンナは、にっこりと笑いながら、『書庫でしたら、後宮内にもございますよ。』と教えてくれた。

なんでも、何代か前の皇帝が寵妃の為に建てたらしい。他の建物に比べ華美さは無いものの、結構立派な造りで、蔵書量も中々のもの。

…ただし、利用者はほぼ皆無。側室の方々は、本に興味は無いようです。

大きな扉を押すと、ギィ、と重々しい音をたててゆっくりと開く。

「…お邪魔します。」

誰に向けるでも無く呟いて、室内へと身を滑り込ませた。

「……………」

ほぼ利用者がいないと聞いていたが、ちゃんと掃除は行き届いている様で、埃っぽさは無い。

少し冷えた空気に、本独特のにおい。シンとした空間は、扉一枚隔てただけなのに、まるで外界から隔絶されたかのような雰囲気があった。

カッン、

自分の靴音が、静かな室内にやけに響く。

いくつも並ぶ棚の一つに近付き、最近身につけたばかりの拙い語学力で何とか背表紙の文字を読んだ。

えーと……… 礼儀作法……… は、まだいいや。

……… 香とかも今はいいです。

……… 取り出す、地図が見たいんだけどなあ。

後、歴史書とか。

私レベルに落としてくれてあると尚よし。『よくわかる鴻国の歴史』
とか『教えて偉い人』みたいなもの。

……… え、ある訳無い???

いやいや。皇帝のお子さんだって、初めは後宮にいるわけですし、
あるかもですよ。

「……………」。

背表紙の文字を追いながら、私は奥へと進む。

カツン、コツン、と足音を響かせながら。

「……………歴史、…歴史。」

ブツブツと独り言を繰り返しながら、私は必死に本を探していた。

「……………歴史、」

「歴史書なら、」

「…っ!?!?」

ふいに、私の独り言に返事が返った。

何の覚悟もしていなかった私は、驚きに一瞬息を止める。

「…歴史書なら、その左隣の棚よ。」

割り込んだ声は、落ち着いたアルトボイス。

静かで凜とした…まるでこの書庫の様な声の主人を探すべく首をめぐらせるよ、

その人は、一段高い場所から私を興味深そうに見ていた。

キツチリと纏め結び上げられた黒髪と、理知的な美貌。派手さは全く無いが、趣味の良い落ち着いた装い。

……… なんですか、この知的美人さんは。

呆然と見上げる私を、美人さんは、上から下まで眺め、ふうん、と意味ありげに頷く。

薄紅色の唇が、ゆるりと口角を上げ、魅惑的な微笑を浮かべた。

「……… 此処に、皇帝の寵以外を欲する女がまだいたのね。」

「……… え？」

首を傾げる私に、美人さんは、あら、と同じ様に首を傾げた。

「……… それとも、皇帝の寵愛を受ける術すべでも学びにきたのかしら？」

その言い方には、明らかに刺があった。

声も、敵意はないものの、決して好意的とは言えない。

……… なにやら、返事が遅くなった事で嫌われてしまったのでしょうか。

少し残念に思いつつも、私は正直に答えを返した。

「…よくは分かりませんが、皇帝陛下の寵は欲しいです。」

「……………」。

私がそう返すと、美人さんは興味を無くした様に冷めた目になった。本格的に嫌われてしまったようです。

ですが、いいえと言えば嘘になります。

「私は陛下が大好きなので、陛下にも好きになっていただきたいと思っと思っていますので。」

「……………え？」

美人さんは、私がそう付け足すと、何故か吊り上がり気味の瞳を睥った。

……………私は何か、変な事を言ったのでしょうか？

目を見開いたまま私を見つめる美人さんに、内心首を傾げつつも、私は彼女に向かって頭を下げた。

「ですが、今必要なのは歴史書なのです。…場所を教えてください、
ありがとうございました。」

「……………」。

長い沈黙が落ちる。

お礼が言えてスッキリした私が、顔を上げると、なんともいえない
顔をしていた美人さんは、小さくポツリと呟いた。

「……………変な子。」と。

「何が知りたいの？」

私の阿呆さ加減に毒気を抜かれたのか、美人さんは呆れた様に嘆息した後、私にそう投げ掛けた。

階段を下り、私の隣に立った美人さんは、私の返答を待たずして、本棚から本を抜き取って行く。

「鴻国の歴史でいいのよね？時代によって本がわかれているから、触りだけ知りたいのなら、この辺りがいいと思うわ。逆に詳細に知りたいのなら、これね。お堅い文章だけれど、史実に沿って書かれているから、変な偏りが無くていいの。…この辺りは面白いけれど、推測が織り交ぜてあるから暇潰し程度に止めておくことね。」

「ご、ご丁寧にありがとうございます。」

耳に心地よいアルトボイスが、流暢に響く。

まるで司書の方の様に、求めている以上の説明を与えてくれる美人さんに、私は吃りながらもお礼を述べた。

「…で？どの辺り？」

にっこりと笑みを浮かべる美人さんは、まるで水を得た魚の様に生き生きとしている。

…本が、とても好きなんですネ。

年上の女性に、可愛らしい、なんて失礼でしょうか。

へらりと笑み返ししながら、私は答えた。

「……えっと、初めから通して知りたいのですが、…一番知りたいのは今、でしょうか。」

「…今？」

「はい。…少し前から、今に至るまで…現皇帝陛下が、どの様に生きてこられたのかを。」

「……………」

私の言葉に、美人さんは驚きと呆れが入り交じった様な顔をした。

「…陛下の事が好きって、本当なのね。」

「はい。」

美人さんは、迷い無く頷いた私をじっと見たが、やがて理知的な美貌に苦笑を浮かべながら、手元の本を棚に戻した。

「……確かに、魅力的な方だね。皇帝という地位を差し引いても、女なら一度は抱いて欲しいと夢見るかもしれないわね。」

…何でしょう。

誉めている筈なのに、美人さんの言葉はとても客観的で冷静です。まるで、その括りの中に、自分はカウントしていないかの様に。

不思議に思いつつも、その大多数の女性の枠に納まっている私は、素直に頷いた。

「そうですね。とてもお優しいですし。」

「…え？」

本を棚に戻していた美人さんは、一拍置いて訝しむ様な声とともに、私を振り返る。

硬質な光を宿す瞳が、品定めをするように私を見た。

「……そういえば貴方、陛下の事を知りたいと言っていたわね。…
…現時点でどれくらい知識があるのかしら。」

「……………」

言われて私は戸惑った。

私がサラサの実家で教わった知識の中に、陛下に関する事は殆ど無い。

それは箱入り娘であった本物のサラサ自身が、政治や王族に関する知識をほぼ持たないから、と説明されていたが…今となっては、意図的に隠していたのではないかとさえ思う。

そしてその隠された意図が、シャロン様の怯えや、美人さんの驚きの示すものなのではないかと。

「……………」

「……………」呆れた。貴方のご両親は、貴方を箱にでも納めていたのかしら。

私の沈黙に答えを読み取った美人さんは、ため息をつき、肩を竦めた。

「…でも、だからこそ、そんなに真っ直ぐ慕えるのね。」

「……………」

…私は、何も返す事が出来ませんでした。

無知な私は、此处で否定するだけの材料を持ちません。

そんな事無い。陛下の何を知ったって、私はあの方が好き。…そんなのは、ただの理想論です。目を逸らしているだけです。

知ってからでなければ、私は胸をはって、好きだと言い切る事も出来ない。

「……………」

棚に本をしまい終えた美人さんは、俯いた私を見て、暫し何か考え事をしていた。

そしてしまった本の代わりに、彼女は一冊の本を取り出す。

無言で手渡されたソレを開くと、それは…

「……………地図？」

「…貴方、時間はある？」

「…はい。」

「じゃあ、私が簡単に教えてあげるわ。」

「……え、」

驚きに目を丸くする私に構わず、彼女は話を進める。

曰く、長くなるから、既存の歴史書は今はいい。

もし興味があるなら、後で自分で読みなさい、との事。

「…いいんですか？」

戸惑う私に、美人さんは形の良い魅惑的な唇を、吊り上げた。

「いいわよ。これはただの好奇心。知識を得た後でも、その真つ直ぐな愛情が歪み無くいられるのか……そんな、質の悪い知識欲だから。」

美人さんの言葉を聞きながら、私は無意識に、手のひらを握り締めたのでした。

側室（仮）の勉強。

「鴻国の歴史は、侵略の歴史。」

書庫の一角に設置されていたテーブルに地図を広げると、美人さんはそう語り始めた。

クリーム色の紙に書かれた地図は、やはり私には見覚えの無いもので、此処が異世界である事を改めて感じる。

地図に描かれているのは、犬の横顔のような形の大陸が一つ。そしてその鼻先から口の辺りにかけて、大きめ島が二つ。

小さな島を除けば、描かれているのはそれだけ。

この世界に大陸が他には無いのか、それとも航海の技術が発展していない等の理由で発見されていないのかは、判断がつかない。

「この国は、初めは小さな国だった。…鴻国の前身は、大陸の南方にあった国『采^{さい}』。農業が盛んな小国にすぎなかったわ。」

美人さんは犬の下顎の辺りを指差し、この辺りね、と指先で小さな円をかいた。

「その小さな国は、ある日襲撃を受けた。…襲ったのは、故郷を持たない流浪の民『鴻』。一族の大半の人間が傭兵などを生業としていた、戦闘部族相手に、農業国に勝ち目など無く、『采』はあつさり滅びたそうよ。」

「……それじゃあ、鴻国を起こしたのは、」

「そう。王族全員を処刑し、新たな王として立ったのは、侵略した部族の長。国名を部族の名と同じ『鴻』と定めた男が、鴻国の始祖よ。」

美人さんが言った通り、鴻国の歴史は侵略の歴史だった。

戦闘に特化した部族が治める国は、次々と戦争をおこし、周辺諸国を飲み込んでアメーバの如く国土を広げていったそうだ。

サラリと説明された美人さんの言葉は、シンプル故に包み隠さず、全編通して実に血なまぐさかった…。

今の鴻国の国土は、大陸の約三分の一。

現時点では戦争は無いものの、数年前までは争いがあつたらしい。鴻国の北に位置し、険しい山を挟んだ隣国である『レダ』は、シャロン様の母国。先の戦争で鴻国に敗れた国と同盟を結んでいた為、終戦後、鴻国の藩属国となったという。

……シャロン様が、怖がるのは無理のない話でした。

負けた国のお姫様が、元敵国へ嫁ぐ。…それは想像以上の恐ろしさでしょう。

「ちなみに、『レダ』の同盟国『カイロア』を滅ぼしたのは、現皇帝陛下よ。」

「……………え……………？」

私は、目を大きく見開いた。

ついでの様にあっさりと告げられた言葉に、何の対処も出来ずに、ただ呆然とする。

「戦争を起こしたのは先帝であるあの方の父君だけれど、指揮をとり、戦の勝利を掴み取ったのは、現皇帝陛下。」

皇太子でありながら前線で指揮し、馬を駆り敵を屠る彼の人を、自国の民は『軍神』と、他国の民は『死神』と呼んだという。

個人の能力もずば抜けているが、戦略を練り人を動かす事に長ける彼は、指揮を任された戦い全てを勝利へと導き、鴻国の発展に多大な貢献をした。

…自国から見れば、ヒーローであり守り神であっても、他国から見れば、侵略者で略奪者。

呆然としたままの私を一瞥し、美人さんは、地図をパタンと閉じた。

「…通り過ぎた後に血の道が築かれる、血塗れの『紅帝』。……お嬢様の初恋相手としては、少々厄介すぎやしないかしら？」

「……私は、」

「…貴方が優しいと感じたあの方の手は、沢山の人間の血に塗れているわ。…直接的ではないかもしれないけれどその中には、貴方位の女の子や、小さな子供のものも、含まれている。」

「……………」

一言も発しなくなった私を、美人さんはじつと見ていた。

質の悪い好奇心、と言っていたのに、その瞳は、思慮深い光を宿している。

「……あの方は、貴方の手に負える様な方ではないわ。」

背負いきれないのなら、聞かなかった事にするのも選択肢の一つよ。

そんな言葉を聞きながら、私は握り締めていた手をゆっくりと開き、手の平を見つめていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6841y/>

目指す地位は縁の下。

2011年12月3日00時30分発行